

偏見を持たないでイエスを見る

ヨハネ福音書7:40-53
【新改訳2017】

- 7:40 このことばを聞いて、群衆の中には、「この方は、確かにあの預言者だ」と言う人たちがいた。
7:41 別の人たちは「この方はキリストだ」と言った。しかし、このように言う人たちもいた。「キリストはガリラヤから出たろうか。」
7:42 キリストはダビデの子孫から、ダビデがいた村、ベツレヘムから出ると、聖書は言っているではないか。」
7:43 こうして、イエスのことで群衆の間に分裂が生じた。
7:44 彼らの中にはイエスを捕らえたいと思う人たちもいたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。
7:45 さて、祭司長たちとパリサイ人たちは、下役たちが自分たちのところに戻って来たとき、彼らに言った。「なぜあの人を連れて来なかったのか。」
7:46 下役たちは答えた。「これまで、あの人のように話した人はいませんでした。」
7:47 そこで、パリサイ人たちは答えた。「おまえたちまで惑わされているのか。」
7:48 議員やパリサイ人の中で、だれかイエスを信じた者がいたか。
7:49 それにしても、律法を知らないこの群衆はのろわれている。」
7:50 彼らのうちの一人で、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。
7:51 「私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知ったうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」
7:52 彼らはニコデモに答えて言った。「あなたもガリラヤの出なのか。よく調べなさい。ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう。」
7:53 「人々はそれぞれ家に帰って行った。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 偏見を持たないでイエスというお方を見るには、何が必要ですか。
(2) 下役たちはどうしてイエスを捕らえられなかったのですか。
(3) 18ヶ月前イエスのところに初めて来たニコデモとこの時のニコデモはどう違いますか。

【解 説】

(1) 偏見を持たないで主の言葉を聞いた人々

仮庵の祭りが終わった8日目に主イエスは大声で叫ばれた。
「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」(ヨハネ7:37-38)
ユダヤ教の儀式では与えることのできない水、人の霊的な渇きを真にいやすことのできる水を与えようという約束である。それは、やがてイエスによってもたらされる聖霊の注ぎの予告であった。

主イエスのことばを聞いた人々の反応は分かれた。ある者は「この方は、確かにあの預言者だ」と言い、モーセのような預言者が起こされるという約束(申命記18:15)が実現したと考えた。

あなたの神、【主】はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない。(申命記18:15)

また別の者は「この方はキリストだ」と言いきった。
イエスというお方についてのうわさであるとか、誰かから聞いた言葉を中心にして、イエスを見ようとするのではなく、イエスが語っておられる言葉そのものに耳を傾けている。
このことは、今日も必要である。キリスト教についてのこの世の評価とか、キリスト教について誰かが語ったり書いたりしているのに耳を貸して、それからキリスト教の話を書くのではなく、それを棚上げして、聖書からじかに聞くという姿勢である。このような姿勢の人々は、必ず真理を知ることができる。これを一般には科学的姿勢と呼ぶ。

(2) 偏見を持って主の言葉を聞いた人々

①一般群衆の中で

人はみな何らかの偏見なり先入観を持っているため、そうした偏見という眼鏡を掛けて見ると、どうしても違った見方ができ来てしまう。この時もそういう人々がいた。
この時にはイエスの出身地にこだわった人たちがいた。
「キリストはガリラヤから出たろうか」
彼らは、旧約聖書のミカ書5章2節の預言を知っていた。「キリスト」がベツレヘムの村の出身であるはずで、ダビデの子孫として生まれると、このユダヤ人たちが信じていた点は正しかった。

「ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」(ミカ5:2)

彼らによれば、イエスはガリラヤのナザレ出身であって、ガリラヤから「キリスト」が出現する、という預言は旧約聖書にない、というのであった。
しかし実際は、イエスはその預言通りベツレヘムでお生まれになったにも関わらず、それを調べようとしなかった。彼らが労を惜みせずに調べさえしたら、イエスがベツレヘムでお生まれになり、マリアを通して、ダビデ直系の子孫としてお生まれになったことを突き止めたことだろう。

②祭司長たちやパリサイ人たち

偏見を持っていたのは、一般群衆だけではない。もっとひどいのは、祭司長たちやパリサイ人たちである。彼らからイエスを捕らえるために派遣された神殿警察の下役たちは、イエスの話を直接聞いた時、感銘を受けて聞き入った。
イエスのように、権威にあふれ、恵み深く、知恵に満ちた話は1度も聞いたことがなかった。それで事実をありのままに報告して、「これまで、あの人のように話した人はいませんでした」と言うと、パリサイ人たちがこう答えている。

「おまえたちまで惑わされているのか。議員やパリサイ人の中で、だれかイエスを信じた者がいたか。」

それにしても、律法を知らないこの群衆はのろわれている(47-49節)

パリサイ人たちの偏見は、権威主義の形を取って、下役たちを威圧した。この世の有力な人がどういう態度を取っているかに訴えている。この世の権力を笠に着ている。
これは今日においても、よく見られる。誰それはキリストについてどういう見方をしていると言って、世の有力者の名前を出してくることがある。また、暗に社会的地位をちらつかせて、キリストを信じることに圧力を掛けてくることもある。また、親の権威を笠に着て、キリスト信仰を持つことをやめさせようとするところがある。
これらは、いずれもこの時のパリサイ人たちと同じ態度である。

(3) ニコデモに見る御霊の働きの多様性

ユダヤ人議会の議員の1人で、パリサイ人であるニコデモは、偏見を持ってものを見ていた人々に対して、異を唱えた(申命記1:17、17:8-9、19:15等)。

「私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知ったうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」(50-51節)

ニコデモはユダヤ人議会の手続きの不備を指摘した。
人々が同じ考えでいる時、それに逆らってもものを言うことは決してやさしいことではない。たといそれが正しいことであってもである。

ニコデモは、18ヶ月前、夜イエスのもとを訪れ、自分が新生しなければならぬことを学んだ人物である。その時、主から、「あなたはイスラエルの教師なのに、そのことが分からないのですか」と言われたほど霊的には余り鋭い人ではなかった。しかし、夜こっそりであったとは言え、自分の悩みをごまかすことをせず、主イエスのもとに求めてきたという事実を見逃すことはできない。彼が主イエスを信じていることは、ほかの人に知られていなかった。

しかし、彼は主イエスが十字架に付けられて、私たちの罪の贖いの死を遂げられた時、十二弟子のほとんどが逃げ去って行ったにもかかわらず、アリマタヤのヨセフを助けて主の遺体を墓に納め、その遺体に敬意を表した。

ニコデモの事例は、有益な教えを多く含んでいる。これは私たちに、御霊の働きには多様性があるということを教えている。

みな同じ救い主に導かれていることは確かである。しかし、みなが同じように導かれるとは限らない。またこれは、御霊の働きが人々の心の中で常に同じ速さで進むとは限らないことを教えている。

他のキリスト者を評価する際、彼らの経験が自分たちと全然違うからといって、すぐ、神の恵みを受けていないと決めつけたり、自分たちと同じような速さで走れないからといってすぐ、その者は狭い道にいないと速断を下すのは用心しなければならない。